

## 第2期丹沢大山自然再生計画 平成24年度事業実施状況報告書

### I ブナ林の再生

#### <主要施策の取組状況>

##### 1 ブナ林の保全・再生対策

- ・ブナ林の衰退・枯死の機構解明の基礎データや再生事業のモニタリングの基礎データとするために、丹沢山、檜洞丸等の計6地点において、気象及びオゾン観測を継続しており、平成24年度は、機器更新した4箇所のメンテナンス、オゾン影響の総合解析等を行った。
- ・ブナの衰退原因の解明の一環として、ブナの衰退枯死の直接的な原因の1つと推定される水分ストレスに着目して、檜洞丸において季節別の水分ストレス調査を行った。これまでの調査から、標高1,200m付近のブナと比較してより標高の高い稜線部では、衰弱木、健全木ともに水分ストレスがブナ衰退に与える影響が疑われる結果が明らかになった。平成24年度は、水分ストレス調査に加えて、網羅的な遺伝子解析による衰退原因の調査を行った。
- ・植生保護柵内外で林床植生の回復状況とブナ等植栽木、天然更新木の生残・成長を調査した。
- ・大規模ギャップにおける森林再生試験として、竜ヶ馬場から蛭ヶ岳の稜線周辺において、ブナ等樹木の集団枯死によって形成されたササ草原2箇所と、ギャップの大きさの異なる3箇所の合計5箇所に試験地を設定して、樹木の更新状況と植生を調査した。

##### 2 ブナ林の衰退原因の低減対策

- ・自然植生回復を目的として委託およびワイルドライフレンジャーによるシカの管理捕獲を実施し、生息環境整備の基盤づくりのための管理捕獲と合わせて、県実施管理捕獲全体で381頭を捕獲した。生息密度調査等のモニタリングを実施した。（Vシカ等野生動物の保護管理再掲）
- ・ブナハバチについて、生息実態が未解明な部分が多いことから、土中の繭の密度及び分布様式調査を実施してきた。これまでの調査結果から、被害が発生しない菰釣山と三国山では繭は低密度で年次推移したが、被害が頻繁に見られる大室山、檜洞丸、丹沢山では繭が高密度の状態推移することが把握されており、平成24年度は、繭、成虫、幼虫の各ステージのモニタリングの他、苗木への薬剤注入による防除試験を実施した。

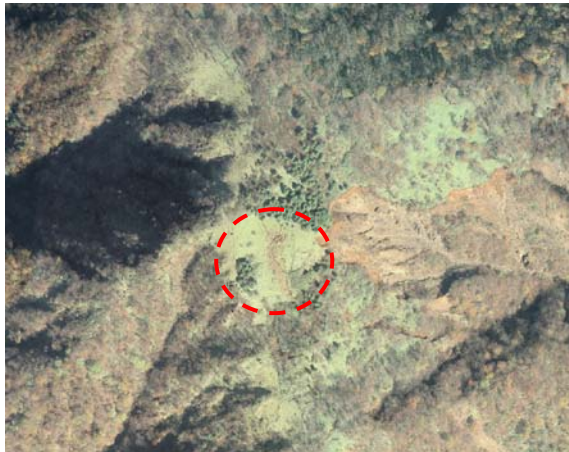
##### 3 ブナ林生態系の衰退影響の低減対策

- ・林床植生衰退地において土壌保全工を施工した（土壌保全工等による稜線部での植生保護柵：4.3ha）。また、先行的に土壌保全工を施工した場所においてモニタリングを実施した。
- ・既設の植生保護柵の巡回点検及び補修を実施するとともに、稜線部で植生保護柵を設置し、希少植物保護を図った（上記植生保護柵実績に含む）。

○ブナ林等の調査研究実施状況（平成 24 年度）

立地環境調査	衰退環境解明調査	広域衰退実態調査	再生技術試験・調査
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ オゾン・気象観測サイトの維持管理。</li> <li>・ オゾン影響の総合解析。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ブナハバチ発生モニタリング。</li> <li>・ 苗木への薬剤注入による防除試験。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 水ストレス調査</li> <li>・ 発現遺伝子による診断調査。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 植生保護柵内での植栽木等の生残・成長調査。</li> <li>・ 土壌保全工先行試験地でのモニタリング。</li> <li>・ 大規模ギャップ試験地設定、植生調査。</li> </ul>

高標高域でのシカ捕獲	土壌保全工
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実績は特定課題Vに含む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 稜線部での植生保護柵設置面積 4.3ha</li> <li>・ 丸太柵工等設置延長 468m</li> </ul>



大規模ギャップ森林再生試験地（空中写真・竜ヶ馬場）



ハバチトラップ



植生保護柵施工箇所（蛭ヶ岳周辺）



土壌保全工先行実施箇所（堂平）

